



長い道を自分で進むこと



一橋大学大学院社会学研究科 教授

村田光二 (むらた こうじ)

1978年、東京大学文学部卒業。1985年、東京大学大学院社会学研究科単位取得退学。帝京大学講師、東京学芸大学助教授、一橋大学社会学部助教授、教授を経て現職。専門は社会心理学。著書は『複雑さに挑む社会心理学』（共著、有斐閣）、『社会と感情』（編著、北大路書房）など。

大学での授業担当を始めて30年が経過した。自慢の一つは病気で急に休んだことが1回しかないことである。しかし、初期に道に迷って授業が自然休講になってしまったことがある。その日はロードレーサーに乗って、大泉にあった実家から北浦和の埼玉大学に午前中の授業をしに行き、午後からは玉川上水にある国立音楽大学で2コマ授業をする予定だった。音大に向かう途中で道がわからなくなり、4限に間に合わなくなってしまったのである。「野生のカン」に頼っていたが、初めての道を行くときは地図を持つべきだったのだろう。それでも5限のほうだけは授業をして、日が暮れるまでに実家に戻ったと記憶している。

今の職場から自転車で出かけて楽しかった道の一つは、仙川の白百合女子大までの東八道路である。このときはマウンテンバイクを使って通ったが、「村田さんに交通費はいらぬわね」と言われたことを覚えている。もう一つの道は、多摩丘陵を越える鎌倉街道であった。鶴川の和光大学の3限の授業のために、昼間にロードバイクで往復することができた。

都心の仕事ではしばしば自分の足で走った。同じ曜日に学習院大学と明治学院大学に非常勤の仕事をもたらしたとき、トンネルを越えて坂を登ってみるとネオンサインがきらめくところに出た。初めて見る六本木ヒルズとテレビ朝日の光景だった。逆に昼間に学習院に向かった年には、赤坂御所を1

周余分に走ってみたり、早稲田界限を駆け抜けてみたりした。ある年は慶応の三田の授業を3限にして、5限に東大の駒場の授業を入れてみた。そうすると、恵比寿を経由して旧山手通に入ることができ、駒場までほんのひとっ走りであった。

「一都市一ラン」をモットーに、出かけて宿泊した街では走るようにしている。特にアメリカの学会大会では朝走っている心理学者が多く、初めて参加した1996年のAPA大会（トロント）では、当時の「ラット・レース」にも出て40歳代前半の部で優勝した（参加者が少なかったのだろう）。初参加の2003年のSPSP大会（ロサンゼルス）でも、現地の社会心理学者ランナー達にお邪魔して一緒に朝練をした。

1996年はAPAの直後にモントリオールでICPがあった。私はロードレーサーを持参して、帰りにはバンクーバーから山に向かい、アイアンマン・カナダというトライアスロン大会に参加した。そう、私は大学の専任教員になる1年前からトライアスロンを志し、現在に至るまで細く長くゴールの無い道を歩んでいる。たいして練習もしないけれど、夏休みがあるおかげで年に1回くらい大会に出る不良(?)中高齢である。

トライアスロンは水泳、自転車、ランニングの3種からなる競技で、オリンピック種目は合計51.5kmである。しかし「アイアンマン」と呼ばれるタイプでは、

それが約226kmになり、先のカナダ大会で私は14時間弱かかって完走した。続けているといえるのは前者の短い距離のものである（フルマラソンよりも所要時間も疲労感も少ない）。いやむしろ、この文章の冒頭から書き連ねているトライアスロンの生活を続けている。

水泳の話が足りなかったが、レースでは様々なところで泳いだ。宮古や伊是名などの南の島。北では六ヶ所村や釜石。琵琶湖、猪苗代湖、手賀沼、長良川。サメよけフェンスを張った瀬戸内海。波崎漁港や蒲郡競艇場。熱帯魚と戯れたハワイ島コナ（ここにもう一度戻りたい）。遊泳禁止の立て札のすぐ横の赤茶けたお台場の海。Escape from Alcatraz という大会では、脱獄不可能と言われた島まで船で連れて行かれ、船から海に落とされてサンフランシスコの浜まで泳ぎ着いた。水とゴーグルとウェットスーツがあれば、すべて何とかなるものだった。

トライアスロンの生活を続ける中で、私は多くの時間を失った。自転車事故で2回、救急車で運ばれた（翌日には教壇に立っていた）。しかし、長くゆっくり自分の力で進む中で、風景が美しくなる場面に出会うこと、自分の体のささやかな声を聞くこと、そして夢を見ているように想念が流れ去る感覚を味わうことができるようになった。マイライフ、マイトライアスロン。幸せは動的平静にある、と思いたい。